

《札幌軟石と煉瓦と、 北海道の古建築展》の栞

と き：平成16年9月1日（水）～10月31日（日）

ところ：北海道立図書館北方資料室展示コーナー

明治の建築は古くから優秀な伝統のある木造日本建築の技術を基礎として、欧米の合理的な生活様式や、建築材料を積極的にとり入れた。当時の新しい建築材料といえば、石材・レンガ・鉄材・セメント・板ガラスなどで、それらの材料は最初は外国からの輸入品であったが、苦心のすえ我が国でも生産できるようになった。

こうして石造・レンガ造・鉄骨造などの洋風建築が生まれた。なかでも石造・レンガ造は明治洋風建築の主流であった。

（※『北海道の開拓と建築 上巻』p473より）

さっぽろなんせき

■ 札幌軟石とは？

▽ 明治・大正期の札幌と小樽は**全国的にも珍しい石造建築物**の多い街だったようです。大通り西13丁目の札幌市資料館は札幌控訴院として1926年に建てられた煉瓦造りの建物ですが、外壁には札幌軟石が使われています。…藻南端の石山側にある白い垂直の壁は、札幌軟石の採取跡ですが、石山は、旧地名を石切山といい、札幌軟石が地名の由来です。…

（※『さっぽろ文庫 77 地形と地質』p144より）

▼都市の造営に当っては、手近なところから建築資材を切り出して用いるのが常である。…小樽運河の石造倉庫群や旧札幌郵便局などはその代表例であるが、石垣や木造家屋の土台石としても、これが広く使用された。これは、**石英安山岩質の溶結凝灰岩**であって…（※『北海道大百科事典 上』p733より 注：ようけつぎょうかいがん）

▽現在の支笏湖の位置を噴出中心とし。白老・苫小牧・千歳・恵庭・月寒・札幌にわたる広範囲に押し出された浮石質凝灰岩である。高層に推積したため、内部にわたり高温状態が保たれ、飴のように浮石粒が互いに膠着（溶解）し、火山灰の状態から脱して石材となるほどの固体性を得るに至ったものである。多孔質であるため、より軽く、加工しやすいので各地で建築ほかに利用されている。…明治4年開拓史により招聘された御雇い教師 A.C. ワルフィールドは、札幌経営案中「独り札幌付近に建築用石材を発見せざるを遺憾とす」と述べている。翌5年同じく御雇い技師トーマス・アンチセルは、**石山で札幌軟石を発見**したと伝えられる。（※『北海道の開拓と建築 上巻』p481より）

▼札幌の軟石建築の**第一号**は、リンゴ園経営者・水原寅蔵が建てた店舗兼住宅の付属石倉である。現・南一条西四丁目の“4丁目プラザ”の西隣に明治九年着工、翌十年完成したものである。（※『さっぽろ文庫 23 札幌の建物』p43より）

れんが □煉瓦について

▼レンガは人類文明の発生とともに始まり、西欧では 5000 年以上の古い歴史と伝統をもっている。メソポタミア・エジプト・インダス文明の発生から……。日本においては、中国から渡来した粘土焼成品で、寺院の基壇や基礎、壁体の一部に遣われていた「磚（せん）」が奈良時代の建築材料として存在した。文久 3 年建築の幕府長崎製鉄所（現三菱重工長崎造船所）に工場建築ではじめて「こんにゃくレンガ（赤れんが）」が使われている。…

北海道におけるレンガ生産の起源は、開拓史により明治 5 年に設置された、茂辺地煉瓦石製造所（現上磯町）が工場として最初のものとするのが、定説のようである。しかし、耐火レンガも含めると、茂辺地工場より 16 年前、安政 3 年亀田郡尻岸内村において、官営の川上煉瓦製造所が設立されていた。

（※『北海道の開拓と建築 上巻』p474 より）

▽札幌煉瓦の先達は、民間企業であったとすると、ひとつは明治 35 年『殖民広報』による「大久保工場」、もう一つは明治 16 年『札幌県勸業課年報』に白石村で「遠藤清五郎」が 16 年に製造していた説。近年、大久保・遠藤の二工場より前の工場について新資料が発見された。それは、明治 11 年の浦河通りの「工藤煉瓦工場」…（※『赤れんが庁舎史話』p36 より記事概略）

▼〔道庁の〕赤れんが庁舎は、明治 19 年の北海道庁設置から始まる。設計は、平井晴二郎を主任とする道庁の技師。フランスやドイツなど諸バロックならではの特徴がある。れんがは長手と小口を交互に並べたフランス積み、半円形アーチはドイツの影響…（※『赤れんが庁舎 話のアルバム』より記事概略）

▽野幌地域におけるレンガ工場の先駆けをなしたのは、北海道炭砒鉄道株式会社の野幌煉化（瓦）工場で、明治 31 年に設立され、レンガの生産だけを行なった。

（※『野幌窯業史』p19 より）

▽明治末期、道内のレンガ消費量の九割を製造していた窯業地は野幌であった。野幌が、他の地域よりもレンガ生産の良い条件をもっていたのは、第一に、容易に原が入る。第二に運搬の便利さ、第三に、レンガを焼くための豊富な燃料が近くにあったからだといわれる。野幌の原土は、野幌高台全部が原料地であり…（雑誌『えべつの歴史 第 6 号』p19 より）

▼△▼ 野幌の煉化もち ▼△▼

創業明治 34 年。作家久保栄の父、当時札幌商工会議所会頭だった久保兵太郎。「煉瓦は食べられないが、瓦が化けたら食えるのではないか」と名付た…

（※雑誌『わが北海道 1973.3 号』p47 より）

▽▲▽ 道立図書館のサイロ ▼▲▽

昭和 18 年ごろまでここで酪農をしていた元野幌の山内兼雄さんが同 10 年ごろ、デントコーン用に建てたもの。高さ 7.2 メートル（うち地下 1.8 メートル）直径 3.6 メートル。現在のサイロとしてはかなり古いもののひとつと思われる。市文京通りの道路拡張工事ではサイロが支障となって解体の運命だったが、文京台地区の道案内用のシンボリック的存在だったサイロを残そうと地元住民や同図書館の熱意がみあって、現在地に 1 ヶ月かかって移設した。

（※『江別れんがアラカルト』p26 より）

ようけつぎょうかいがん

熔結凝灰岩

固い火山性の凝灰岩で、いっしょに溶解されるガラス片の石基の中に結晶と岩片が組み込まれている。この溶接によってガラス片の形が失われ、もとの組織状態に戻る場合もある。組成は龍紋岩に似ている。

[資料：『岩石と鉱物の写真図鑑』（クリス・ペラント著 日本ヴォーグ社 1997）

さっぽろなんせき

札幌軟石

札幌市南区が主産地で豊平川の左右両岸に一方は硬石山、他方は軟石山として採掘されているうちの軟石の新第三系凝灰石。その他真駒内からも産する。灰色を基調として赤味と青味がある。風化に強く耐火力がある。建築材、倉庫、窓、石塀などに使用される。

[資料：『石の俗称 - 面白い雲根志の世界』（加藤碩一ほか著 愛智出版 1999）]